格子を開けると内らに金綱の扉がある。三尺位の高さだ。
僕は女の手首を掴んで、女が下駄を脱ぐ間もあらせず、縁へ引つ張り上げた。
それから抱きかゝへて、放り込む様にあみ扉を上からまたがせて、越させたのだ。
中は疊が四十枚敷いてある、がらんとした廣間だ。
ローソクが二本しかともつてゐない薄暗がりだ、女はしどけなくずぶ仆れて起き上らうともしない。
僕も昂奮してゐた。
右手の襖をあけて板戸をあけてずつと奥が僕の部屋なのだ。
手探りで其處まで行かなければならない。
『歸して下さい。
おぢいちやんに叱られるから』
振りもがき傷心して、女はそれでも大きい聲は立てないで抵抗した。
天井で鼠がチュッチュッと騒いで走る。